第32回 保団連 医療研究フォーラムin愛知

一人ひとりの尊厳を守る社会をめざして

～医療人に求められること～

10月8日（日）～9日（月・祝）、愛知県名古屋市「ウインクあいち」にて第32回保団連医療研究フォーラムが「一人ひとりの尊敬を守る社会をめざして～医療人に求められること～」をメインテーマに開催され、全国より826名の参加がありました。

佐賀協会からは、藤戸好典会長、新井良一副会長、古賀聖祥常任理事、山口宏和常任理事、田中裕幸理事、中島雅典理事、石橋千和病院・有床診部員と事務局が参加し、田中理事、石橋部員が演題発表されました。

以下、参加者からの報告です。

■1日目

保団連の医療研究フォーラムが今年は名古屋市で開催されました。初日はノーベル物理学賞の益川敏英先生と諏訪中央病院名誉院長の鎌田實先生の対談です。

益川先生は小さい時から「よく本を読んでいた」とのことで、そして「その本の背景や奥に多くのものが存在している。そして今でも2万冊は蔵書していて、しかしその半分は大学の学生たちが借りて行っている」とお話がありました。この事は次代を担う子どもたちに大変有用な話でした。

鎌田實先生（左）と益川敏英先生による対談

鎌田先生はご自分の成長期の生活の大変な中で国民の命を守るために、まず頑張って医師になられ、国内の病院で研鑽されました。近年は国際的紛争の地に出向いて命懸けで子どもたちを守る医療と人道支援や平和活動を熱心に実施しておられます。

最後に益川先生は今日までを振り返り「人より変わった事をしてきた。変人」と話され、鎌田先生も大きくうなずいておられました。物理学と医学の経験の多いお二人の共通点はその道で型にはまらない、しがらみのない人生を歩み続けておられる事でした。われわれ地域医療を守っている者は、現在や近い未来の生活や、診療費の事で毎日必死に過ごしています。しかし鎌田先生は自らの生活や生命さえも危険にさらされる中で、世界の人々の「命を守る」ために頑張っておられ感動いたしました。

さて2日目の分科会には私も研究発表いたしました。「多職種連携」のコーナーがありましたので、現在努力中の認知症の皆さまを守るための診療活動について症例を挙げて報告いたしました。テーマは「医療と介護の丁寧な連携～特にグループホームにご入居者への機能訓練について～」です。ご存知のようにわが国は世界有数の長寿国ですが2025年には75歳以上の後期高齢者が750万人以上になり、全てのことが「高齢者対応」で進んでいかねばなりません。私たちは医療班ですので皆さまの「命を守る」ためにこれまでも長い間努力し、その結果慶事ですが、稀に見る長寿社会になってまいりました。今度は「フレイルやサルコペニア」を抱えた、さらに現在医療界での特効薬のない認知症や独居老人等、さすがに私たちも全然経験のない「超長寿社会」に向かっています。

そのような中で、ご本人様ではなくご家族様やご伴侶様からのご相談で「ご家庭で24時間の介護、介助が困難である」との申し出でグループホームへのご入居を希望されますが、現在は2ユニット18名で、要支援2から要介護1から5までの方でやはり重度の認知症者です。1事業所2ユニットまでの運営が許可されています。私が所属しています鳥栖三養基地区医師会地域で現在32事業所が実働していますが、今後どのように維持運営していくのか、それとも今後もっと増加の傾向になるのか、まさに超高齢者、重度の認知症者の確実な増加に、私たちは精一杯の準備と努力が極めて重要であると想像いたします。この2年間私も一生懸命研修し、認知症かかりつけ医となり様子を見ていますが、現在まだ特効薬が無いこの認知症者は家人や施設のマンパワーやクオリティーが不足している中で、全体的に車椅子生活での見守りが多く、確実にこの四肢体幹、指先までの、専門家のリハビリテーションはできてないように思われます。「自分が認知症になったらどうするか、車椅子に乗ったままで一日中過ごす事がどんなに寂しいか」自分自身も70歳を過ぎて深く考えさせられました。

（病院・有床診部員　石橋　千和）

「更年期以降の女性の高LDLコレステロール血症の基準値は180mg/dL以上で良い」で演題発表される田中裕幸理事

「医療と介護の丁寧な連携～特にグループホームにご入居者への機能訓練について～」で演題発表される石橋千和部員

■2日目

2日目午前の部の第3分科会のトップバッターとして、私は「更年期以降の女性の高LDLコレステロール血症の基準値は180mg／dL以上で良い」を発表した。なお、本分科会では11の演題発表があり、終了後には演者の柴田先生（千葉）や椎貝先生（茨城）と個人的に話す機会があった。

84歳の柴田先生は現役の開業医で、癌に対する詳細な検討を発表、カプセル内視鏡をプレゼントとしていただいた。現在63歳の私にとって20年後の目標にしたい方だった。

また79歳の椎貝先生は病院長を退いた後に開業、今でも探究心を失うことなく研究発表だけでなく最新の知識で厳しい質問も浴びせられ、私にもスタチンの副作用について質問、後日資料を送ってこられた。このように両先生が高齢になっても医学に疑問を持ち研究できるのは発表の場が与えられているからで、結果、保団連の研究フォーラムの開催意義が再確認されたといえる。

午後は3つのシンポジウムのうち「子どもの貧困と健康～医療者としてどう支援できるのか～」に参加した。会場は満席で熱気ムンムンの中、首都大学東京都市教育学部の阿部彩教授が基調講演を行い、報告者として水野美穂子氏（小児科医）、戸井逸美氏（歯科医）、和田浩氏（小児科医）が登壇した。阿部教授は子供の健康格差の実態とその要因、さらに厳しい保護者の実態などについて、水野氏は貧困により十分な教育が得られない場合、貧困の連鎖につながること、また小児科医は子どもの代弁者として積極的に児童相談所に関わり、子どもの養育環境を改善する努力をすべきであることを強調された。

（理事　田中　裕幸）

保険医メールマガジン

MAIL MAGAZINE

佐賀県保険医協会では、会員の先生方を対象に電子メールを活用したメールマガジンを発行しています。ご希望の方はお名前・医療機関名を下記アドレスまでご連絡ください。不定期にメールマガジンをお送りします。

hoken-i@star.saganet.ne.jp

請求事務をお引き受けします

毎月の保険事務はおまかせ下さい。
当会所属の専門家がレセプト作成から提出まで
責任をもって代行致します。
（お問い合わせ下されば係員が参上致します。）

医療事務研究会グループ
（有）医療保険事務協会

久留米市東和町6-12　TOWAビル3F
TEL（0942）38-7673